

3月第2週の礼拝説教

- 日 時：2026年3月8日（日）10：30～11：30 受難節第3主日
- 説 教：保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マルコによる福音書8章27～38節（新約P77～78）
- 説教題：「自分の十字架を背負って」
- 讃美歌：3（扉を開きて われを導き、）
297（栄の主イエスの 十字架をあおげば、）

私たちは今、主イエスの苦しみを覚える受難節を歩んでいます。けれども私自身、そのことを十分に意識して毎日をご過ごしているかと言えば、ほとんどの時間はそうではないように思います。しかし、先週は自分自身が信仰者としてどのような歩みをしているのかを考えさせられた一週間でした。そのことを本日の週報の【牧師室より】よりの囲みで、二つ記しておきました。一つは、2月24日に天に召された河野はるみさんの納棺式やご葬儀を執り行いながら、ずっと考えていたことでした。ご遺族の方々ほとんどが「本人が一番ショックを受けていただろう」と語っておられたのです。1月になって、河野さんは様々な会合で食事をすることがあり、体調の変化を感じて病院に行かれたそうです。そして、1月26日には病名と余命を宣告されたというのです。2月24日にはその通りに召されていかれました。私自身と2歳しか違いがない、いわば同世代の方でした。21年間の民生委員・児童委員の任を昨年11月に全うされ、おそらくこれからは、長年続けて来られたコーラスだけではなく様々なことに取り組みたいと考えておられたのではないかと思うと、その無念さが私自身のことのように思われてなりません。納棺式では、私がこれまで行ってまいりましたこととは異なり、今回は納棺式そのものが見せる儀式になっているように感じました。「おくりびと」という映画がありました。その映画が、いわば大きな影響を与えて、ご遺族に見せる形を大事にするという風潮になって来ているようです。しかし、本当にそこで、その方の一生が明らかになったのかと思うと、少し違うような気がいたしておりました。二つ目は、2月28日より始まった「米・イスラエルのイラン攻撃」のことです。今この時も多くの人々の命が失われているという恐ろしい現実をもちろん危惧しております。けれども、その争いによってホルムズ海峡の閉鎖状態が続くことになれば、原油を中東からの輸入に依存している日本という国の民である私たちの日常生活に深刻な影響がもたらされるのではないかと、ということに関心が向いている私自身の本心見つめざるを得ませんでした。「主は地のはてまでも戦いをやめしめ、弓をおり矛をたち、戦車を火にて焼きたもう」（文語訳）との詩編46篇10節のみ言葉を思い出しておりました。世界が混沌として、人と人、民族と民族、国と国が争っている中で、そういう状況を根本的に回復してくださるのはどなたなのかということ、私たちはもう一度考えなければならない、と思います。私たちの身近な状況でさえ、私一人の祈りでは何も変わらないのだから、世界の状況は私一人が祈ったり考えても何も変わらない、と最初から思ってしまう誘惑がいつもあります。けれども、私一人で祈る、あるいは、その祈りを共にしてくださる方々と一緒に祈り合う、そういうことが本当に神様からご覧になって力になっていく、そして、神様が働いてくださる、そういうことに私たちは本当に信頼していきたいと思っております。

さて、本日の聖書箇所まいります。本日の箇所は、主イエスの弟子の一人ペトロが信仰を言い表す場面と、それに続いて主イエスが初めてご自身の死と復活を予告された場面が記されています。8章27節から30節までの「ペトロの信仰告白」と呼ばれる箇所は、マルコによる福音書の中でも非常に重要な部分とされています。それに続く31節から38節までは、主イエスの受難予告と呼ばれている箇所、まさに受難節に聴くべき御言葉が語られているのです。8章27節では、主イエスは「人々は、わたしのことを何者だと言っているのか」と問われます。主イエスは、これまで、ご自身が何者なのかというこ

とを明確に語ってはいません。例えば「わたしは神の子、救い主である」と自ら語ったりはしていないのです。多くの御言葉を語り、御業を行うことによってご自身が神の子であることを示されているのです。しかしここで初めて、弟子たちに向かって、「周囲を取り巻く人々は様々なことを言っているかもしれないが、わたしに従っているあなた方はわたしのことを何者だと言うのか」と問われたのです。この問いは、私たちも聖書を読み、主イエスによる救いを求めていく中で必ず問われることです。「あなたは私のことを何者だと思うのか」、それはいつも私たちにも問いかけられている問いです。この主イエスの問いかけに対して真っ先に答えたのはペトロでした。ペトロはガリラヤ湖畔で主イエスに最初に召し出されたものですから、いつも自分は弟子たち中で一番であると思っていたのかもしれませんが、ですから、ここでも主イエスの問いかけに対して、ペトロは「待ってました」とばかりに自信を持ってお答えしたと思います。「あなたは、メシアです」との答えは、正論でした。メシアという言葉はギリシャ語で言うとキリストになります。救い主を表す言葉です。ここで、ペトロは、主イエスのことを「救い主」、「キリスト」だと告白したのです。しかし不思議なことに、その直後の主イエスの言葉は、「あなたは正しい、立派だ、本当にその通りだ」と褒めてくださったものではなかったのです。そうではなく「御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた」のでした。その理由が明らかにされていくのが、続く段落の31節から38節です。

31節をご覧ください。「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっていると弟子たちに教え始められた」とあります。ペトロから見れば、自分がメシア、救い主と告白する人は、イスラエルという国を救う王様であり指導者であるはずでしたから、排斥され殺されるなどあってはならないことでした。だからこそ、この主イエスの言葉を聞いて、とっさにペトロは主イエスをいさめ始めたのです。今までに知らされていなかったメシアの姿、それこそ真のメシアの姿であるにも関わらず、ペトロはそれを受け入れることが出来なかったのです。ペトロは、イエスを救い主と告白した直後に、その救い主としての主イエスの姿に躓きました。自分が告白したことが意味することを示されて、それを受け入れることが出来なかったのです。ここには、私たち人間が、救い主を求める時の姿が示されていると言ってもよいと思います。主イエスを救い主として受け入れようとする時、自分が望んでいる救い主の姿を思い描き、それに主イエスを従わせようとしてしまうのです。心の中で主イエスを自分の思い描くメシアにしてしまうのです。そこでペトロは、「イエスをわきへお連れして、いさめ始めた」のです。このこともまた、私たちが繰り返している行為ではないでしょうか。「イエス様、あなたは救い主なので、私たちの願っているお姿で御業をなさってください。私たちが聞きたい御言葉で救いをお語りください。」と日常的に祈りを繰り返している私自身を示されるような気がします。それに対して、主イエスは、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」と激しく叱責されました。

この時の情景を思い浮かべてみましょう。十字架への道行きを誰よりも苦しみつつ歩んでいたのは主イエスでした。もしかしたら、主イエスご自身が、誰よりもエルサレムに行くのを止めたいと思っていたかもしれません。主イエスは神の御子でありつつ真の人となられ、人間の経験する苦しみを苦しまれた方なのです。しかし、苦しまれつつも、ただ、父なる神の思いに従い、真の救いの御業を成し遂げるためにエルサレムへの道を歩まれたのです。しかし、ペトロは、主イエスを神の御心に従う道から引き離そうとしていたのです。ですから、主イエスはペトロを「サタン」と呼んで激しく退けるのです。結局、ペトロは、主イエスをメシアと告白したすぐ後に、神のことではなく人間のことを思っているのです。そのようなペトロに、主イエスはここで、「引き下がれ」と言われています。これは、自分の後ろに下がれということです。十字架に向けて歩む自分の前に立ちちはだかるのではなく、もう一度、自分の後ろに下がれということです。主イエスの前で御心に従う歩みを妨げるのではなく、主イエスの後に従いつ

つ御心にそう歩みをするようにと言われるのです。主イエスは激しく叱責なさることによって、人間を支配する罪と戦われているのです。人々を罪から救うために進まれる、ご自身の歩むべき道を明確にし、そこを歩もうとされているのです。

それでは、主イエスの後に従う歩みとはどのようなものなのでしょう。34節には次のようにあります。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。この「自分の十字架を背負って」というのは何を意味するのでしょうか。「十字架を背負う」とは、ゴルゴタの十字架で死なれた主イエスの苦しみを意味しています。この後、主イエスは十字架に架けられ、予告通り殺されるのです。もし主イエスに従うのであれば、主イエスに従って、その苦しみを担えということです。もちろん、ここで、主イエスが背負った十字架と同じ十字架を背負えというわけではありません。主イエスの苦しみは、人間の罪を贖うための苦しみです。私たちの身代わりとなって十字架で死んで下さったのです。私たちがそれと同じ十字架を負うことはできません。だからこそ、私たちは、そのような言葉を聞くと、なんとなく後ずさりしてしまうのではないのでしょうか。しかし、この言葉は、弟子たちだけではなく「群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。」と記されていることに注目したいと思います。つまり、主イエスは、特別な人ではなく、主イエスに従う全ての人に言われているのです。ここで、主イエスは、「自分の十字架を背負って」と言われています。私たちが、それぞれが置かれた場で、それぞれに応じた仕方で十字架を担うようにとされているのです。それぞれが担うべき十字架、苦しみとは、キリスト者として歩む、キリストに従う中で経験する苦しみです。主イエスの後に従って歩めば苦しみがなくなる、自分の願望が叶えられる、というわけではありません。むしろ、その歩みにおいてこそ、様々な試練とぶつかるのです。教会の礼拝に出るようになった、主イエスを信じるという告白をして洗礼を受けた、しかし逆に、様々な悩みが増えてしまったと嘆いて、教会を離れてしまう方が多いとよく聞きます。主イエスに従う歩みが、自分の救いにとって何の意味があるのか、こんなはずではなかった、という思いになったりすることがあります。しかし、そのような中で、私たちは主イエスが語られる「わたしに従いなさい」との呼びかけを聞くのです。それが受難節の日々の歩みなのです。

お祈りをします。

主なる神様、今日は受難節の第3週目を迎えました。主イエス・キリストが、十字架への道行きを始められています。そのことを私たちは深く心に刻みながら、私は主イエス・キリストの前に先立って道案内をしている、あるいは、主イエスと人々との間に私が立って架け橋となっている、というような思いではなく、主イエスが「わたしの後ろについてきなさい。」とお語りになった言葉を深く受け止めていきたいと思えます。私たちの今週1週間の歩みをどうぞ顧みてください。今、世界は新しい戦争が起こり、多くの人々の命がこの時も失われています。そのことを深く私たちは主なる神様に祈り求め、その争いがあなたによって止めていただくことができるようにと願い続けていきたいと思えます。この祈りを主イエス・キリストの御名によっておささげいたします。アーメン